様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月１５日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2008～2012
課題番号：２０２５１００９
研究課題名（和文）　「先住民」のアイデンティティーの交渉

研究課題名（英文）　Negotiation of Indigenous Identity

研究代表者
窪田　幸子（KUBOTA SACHIKO）
神戸大学・国際文化学研究科・教授
研究者番号：８０２６８５０７

研究成果の概要（和文）：本研究は、20 世紀末から力を持つようになった国際的なイデオロギーとしての「先住民」概念を視野に入れつつ、国際世論と国家の少数民族政策のもとで、少数者である当事者の人々が、どのように先住民としての自己のアイデンティティを構築していくのかをあきらかにすることを目的とするものである。その結果、先住民としてのアイデンティティを選び取る・選び取らないという選択の幅がみられる現状には、グローバリゼーション、なかでもネオリベラルな経済的影響が大きいことが明らかになった。最終年に開催したとりまとめの国際シンポジウムではこのスキームをベースとして、代表者、分担者そして海外研究協力者の全員が研究発表を行った。

研究成果の概要（英文）：This research project was focused on how the minority people construct their identity as ‘indigenous’ in the climate of international expansion of ideology of ‘indigenous’ and also in the political situations of each countries. As a result of the five year’s cooperative research from comparative point of view, it became clear that the difference of the identity construction, - from the people who identify themselves as indigenous to the people who deny it - is the result of economical globalization, especially neo-liberalism. From this shared understanding, members have presented each papers at the final international symposium held in the final year. We are now in the process of the publication of the result.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	10,500,000	3,150,000	13,650,000
２００９年度	6,500,000	1,950,000	8,450,000
２０１０年度	6,700,000	2,010,000	8,710,000
２０１１年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
２０１２年度	2,900,000	870,000	3,770,000
総　計	31,900,000	9,570,000	41,470,000

研究分野：文化人類学
科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民族学
キーワード：オーストラリア、先住民、少数者、国家・人権、アイデンティティ、ネオリベラリズム、グローバリゼーション

１．研究開始当初の背景

先住民研究は、1993 年の国連の世界の先住

民族の国際年、1994 年からの世界の先住民族の国際 10 年、そして 2005 年からの先住民族の国際 10 年第２、などの動きをうけて、先住民族の権利主張をサポートする動きとともに進展してきていた。2005 年からは『世界の先住民族』と題された講座が出版され(全 12 巻、明石書店 2005-2007)、放送大学大学院の講義において『文化人類学研究―先住民の世界』の講義が開講された（放送大学大学院教材　2005)。2008 年 9 月には 20 年以上の議論を行ってきた先住民の権利宣言が可決されたが、これによってさらに先住民への注目がました。国外においても特に 1990 年代後半から先住民研究は活発になってきており、先住民の権利、伝統的知識の保護、開発などとの関連で盛んに研究が行われてきている状況であった（例えば、Blaser, Feit & McRae 2004, Havemann 1999 など)。代表者は海外の研究者とも密な連絡をとり、関心を共有して研究をおこなってきた。2009 年には国際人類学会で、西オーストラリア大学のアシアロイ博士の組織するセッション「先住民性の比較」で、発表をおこなった。代表者は 1980 年からのアボリジニ社会の変化についての研究を基礎として、2000 年ごろから視点をひろげ、ポストコロニアル状況にある先住民社会、国際的な場面での先住民的知識など、より広い文脈での先住民についての研究を展開し、オーストラリアだけではなく、カナダのイヌイット社会、日本のアイヌ社会でも比較調査、研究をおこなってきた。そして 2004 年からは国立民族学博物館において共同研究会「「先住民」とは誰か？―先住民イデオロギーの潜勢的／顕在的形態とその社会歴史的背景に関する研究」を組織し、班員とともに「先住民」についての共同研究を行ってきた。この共同研究の成果は 2009 年に商業出版をおこなった。本研究計画は、このような共同研究とこれまでの各個研究を基礎とし、「先住民」が立ち現れる具体的な場面について、そこにかかわる複数のエージェンシーとその動態を明らかにしようとするものであった。

２．研究の目的

本研究は、20 世紀末から影響力を増してきた国際的なイデオロギーとしての「先住民」概念を中心に、このような国際世論と、国家の少数民族政策の影響のもと、少数者である彼らが近代国家の枠組みの中で、どのように主流社会と交渉し、自己のアイデンティティを構築していくのか、その動態を明らかにすることを目的とする。1990 年代から国連を中心として先住民言説は加速度的に力を持つようになってきた。そのことを背景として、複数の国では、国内の先住民の権利を拡大させる方向への動きが見られた。また、アジアやアフリカなどの、いわゆる典型的な先住民とは呼べない人々の間からも「先住民」としての権利主張の声があらわれるようになってきている。代表者がこれまで調査を続けてきたオーストラリアのアボリジニの人々は、入植地として成立した国家の中に、それ以前からいた少数者であり、いわゆる典型的な先住民と呼べる状況にある。国際的、国内的状況の中で 1980 年代以降、オーストラリアでは彼らの権利拡大が図られてきたが、そうした中でアボリジニの人々自身のアイデンティティ表出にも変化が見られるようになってきた。しかし、2007 年オーストラリア政府による先住民政策が大きく変更され、彼らに大きな影響がある可能性が生まれた。このような状況は、国際世論と国家、そして先住民という三者の力学的関係を考えるとき、非常に興味深い事例を提示すると考えられる。国内政策が、国際的な言説と矛盾するとき、国内の少数者は、どのようにその位置取りを行っていくのだろうか。本研究では、オーストラリアを調査対象とし、先住民であるアボリジニの人々が大きく変化する国内的状況の中でどのような対応、交渉を行うのかを調査検証する。その際、オーストラリアを専門とする研究者のみでこの調査を行うのではなく、他地域を専門とする研究者も巻き込む形でアボリジニの交渉について検証する。それにより、単に国内的状況の分析や理解に偏らず、先住民と国家、国際社会という三者間関係のダイナミクスについて、より広く意義深い理解が得られることになる。

３．研究の方法

(1) 研究は 5 年間の研究期間を設定している。2007 年 7 月、オーストラリアではアボリジニについての政策が変更された。それはこれまでのアボリジニの権利を拡大していく動きとは正反対の動きに見えるものであり、調査地は混乱状態となった。このような国内の先住民政策の大きな転換は、ローカルな場にどのような影響を与え、彼らは自己の存在についてどう交渉しなおすのか。一方、国際社会では、20 年あまりの議論を経て、国連において 2007 年 9 月に先住民宣言が採択された。この宣言は今後、各国の先住民にどのような影響を与えることになるのだろうか。研究期間の 5 年間は、以上の二つの意味において、先住民をめぐってはクリティカルな時期といえ、アボリジニの人々が、どのように自己のアイデンティティを規定するのか、どのように主張を展開するのかに注目することは重要であると考えられた。そしてこの変化を、他地域を専門として少数者の研究を展開してきた研究者とともに調査し、議論を交わすことによって、国内的な政治社会状況にとらわれることなく、国際社会の言説の持つ力、

国家政策の影響、そしてローカルな少数者の選択と交渉と主張という三者の間の動態を、比較の視点を活用することで、明らかにしようとした。

(2) 本研究計画は、四部から構成される。第一はこれまでオーストラリア・アボリジニを調査対象としてきた人類学者による現地調査である。それぞれの調査対象地域で、クリティカルなこの時期にどのようなローカルな変化が起きているのかを綿密に調査する。第二は、他地域を専門とする研究分担者と共同でのオーストラリア調査である。比較の視点からオーストラリアという地域でおきている先住民の変化について、調査検討をおこなう。第三は、オーストラリアでの知見の視点から、それぞれの専門地域での比較調査を行うことである。オーストラリアでの先住民の現代的な動態を抑えた上で、それぞれの専門地域について比較の視点での調査をおこなう。そして第四は、研究集会である。ここにおいて、調査によって得られた互いの知見を交わし、国際社会、国内政策のなかにあって、先住民／少数者がどのように自己のアイデンティティを交渉し、構築するのかについての議論を組み立てることを目的とする。

(3) 研究の初年度は、当初全員でのオーストラリアの調査を予定したが、実際には半分の班員での調査となった。オーストラリア政府の先住民政策の変化は、北部特別州に特に大きな影響を与えることが予想されていた。北部特別州は、これまで、代表者の窪田、分担者の杉藤、協力者のピーターソンが調査を行ってきた地域である。この地域で現在起きている変化について、他地域を専門とする研究分担者とともに調査を行なった。それに先立ち、首都キャンベラのオーストラリア先住民研究所、およびオーストラリア国立大学において、オーストラリアの先住民政策、国際世論との関係についての予備的な文献調査を行うとともに、双方の機関のアボリジニ研究者との研究集会を開催した。これにより、特に比較研究の研究者を中心としてオーストラリアの政治的状況と、アボリジニの現状についての予備的知識を得るとともに、調査の焦点を明確にした。その後、中央沙漠のイエンデム・コミュニティ、中央アーネムランド地域のマニングリダ・コミュニティ、そして東アーネムランドのイルカラ・コミュニティにて調査をおこなった。そして、アボリジニの権利獲得運動の中心地であるシドニー周辺地域でも調査も行なった。

(4) 2年度目は、残りの半数の班員でのオーストラリア調査を行った。まず、首都キャンベラのオーストラリア先住民研究所、およびオーストラリア国立大学において、オーストラリアの先住民政策、国際世論についての文献調査、および、双方の機関のアボリジニ研究者との研究集会を開催し議論をかわした。その後、中央沙漠のイエンデム・コミュニティ、中央アーネムランド地域のマニングリダ・コミュニティ、そして東アーネムランドのガリウィンク・コミュニティにて調査をおこなった。

(5) また、比較研究の研究分担者は、3年度、4年度に、それぞれの専門地域で、オーストラリアでの知見をふまえて比較調査を行なった。一方、アボリジニ研究の研究代表者・研究分担者・研究協力者は、比較研究の分担研究者に協力するとともに、それぞれの専門地域での調査をおこなった。研究代表者は、ピーターソンをはじめ、オーストラリアのアボリジニ研究者との研究懇談を重ね、最終年度に予定する国際的集会を準備した。また、それぞれの成果を持ち寄り、各年に3回、国内集会を予定した。

４．研究成果

(1) 初年度の合同オーストラリア海外調査を、8月に4週間行なった。現地調査は、東アーネムランドのガルキラ・コミュニティでのワークショップ、中央アーネムランド地域のマニグリンダ・コミュニティ調査、中央沙漠のイエンデム・コミュニティ調査をおこなった。その後、首都キャンベラのオーストラリア先住民研究所、およびオーストラリア国立大学において、オーストラリアの先住民政策、国際世論についての文献調査を行なった。そして、双方の機関のアボリジニ研究者との共同研究会を2日間開催し、各々の研究発表を行い、問題意識を共有し、議論を展開させた。また、帰国後、2度の国内集会を持ち、それぞれの研究成果を発表し、全員が成果を共有した。また、代表者は、〇〇において、先住民研究についての研究打ち合わせをおこない、国際的動向を本研究に加わえた。これにより、オーストラリアの先住民の於かれた状況が非常に特殊であり、比較研究の視点から見て、彼らの経済的状況の特異性が明らかになった。

(2) 研究の2年度目は、昨年オーストラリアにいけなかった研究分担者、研究協力者と、研究代表者がともに、オーストラリアでの合同調査を行なった。中央アーネムランド地域のマニグリンダ・コミュニティおよび、周りに散在する複数のアウトステーション、ガリウィンク・コミュニティー、および中央沙漠のイエンデム・コミュニティでの参与観察とインタビュー調査を行なった。その後、キャンベラのオーストラリア国立大学において、オーストラリアの先住民政策についての文献調査を行なうとともに、本プロジェクトの連携研究者でもある、アボリジニ研究の専門家の参加をえて、共同ワークショップを2日

間開催した。参加者全員が研究発表を行い、議論を展開させた。帰国後、国内でも、2 度の国内集会を持ち、全員の研究成果を発表、共有し、このプロジェクトで明らかにするべき論点について、かなり明確な意識を共有することができるようになってきている。
2 年度までに全員がオーストラリアでの調査を行い、先住民としての権利が保障され、一方で制限をうけている現状を共有した。比較の視点から見ると彼らへの先住民政策自体が、保護主義的であることがわかってきた。また、代表者は、12 月にシドニーで行なわれたオーストラリア人類学会に出席し、先住民政策変化とその先住民側の対応についての研究発表を行い、国際的な議論の流れを確認し、これについてもメンバーと共有した。
(3) 研究の 3 年度目は、過去 2 年間に行ったオーストラリアでの全員での調査をふまえて、および各自の専門地域での調査をおこなった。国内集会を 2 度おこない、議論を進化させたうえで、12 月に国際ワークショップをおこなった。海外研究協力者のピーターソン教授、オルトマン教授を招へいし、また、マオリ研究者である、メラタ研究員をニュージーランドからゲストとして招へいし、大阪で国際ワークショップを 2 日間にわたり開催した。使用言語は英語とし、全員での通訳を交えず議論した。マクワリー大学のホーイット教授をはじめ、国内の研究者や大学院生もディスカッサントとして多数参加し、先住民という概念の有効性をふくめ活発な議論を展開した。参加を希望する研究者の多く、この問題への興味が大きいことを示しており、本研究の成果への期待が大きいことが改めて納得された。さらに、代表者は、オーストラリアで補充調査を行うとともに、ピーターソン教授、オルトマン教授、ホーウィット教授と、最終年度に計画している国際シンポジウムと出版に向けて、今回のワークショップの結果を発展させてゆくための具体的な研究打ち合わせをおこなった。また、台湾での原住民の政策と表象についての調査、ネパールでの先住民の動向調査も並行して行った。
(4) 第 4 年度目は国内で 3 回の研究会を開催し、研究代表者の先住性を考える視点を示し、全員で討論を行なった。そのなかで「民主自由主義と先住性」、「新自由主義と先住性」などの論点を先鋭化させてきた。後半二度の研究会には、東京大学の松井教授、名和教授、一橋大学名誉教授の清水教授にコメンテーターとして参加を依頼、議論の進化発展がみられた。また研究会と並行して、代表者分担者は、それぞれの調査地でこれまでの知見を踏まえて追加調査を行うとともに、文献調査を行った。研究代表者は、来年度の最終年度に向けて、国内での関係諸氏、ならびにオーストラリアの共同調査者との研究打ち合わせを重ねた。本調査の中心地であるオーストラリアでは、先住民を巡る動きが活発である。しかし、それは、ある意味で世界的な先住民の権利拡大に逆行する動きであるにもかかわらず、それが継続されていることが興味深い。このようなオーストラリアの現在について問題意識を共有し、最終シンポジウムの論点とすることを確認した。シンポジウムでは、民主主義と新自由主義という概念を中心として、先住性についての発表を各調査地の文脈から行っていくこととした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 20 件）

① 窪田幸子、博物館とフェティシズム―秘匿と開示をめぐる地域博物館の抵抗と交渉、フェティシズム研究２　越境するモノ（田中雅一編）、査読有、2013、印刷中
② 曽我亨、制度が成立するとき、制度：人類社会の進化（河合香吏編、京都大学学術出版会）、査読有、2013、17-35
③ 内堀基光、死という制度―その初発をめぐって、制度：人類社会の進化（河合香吏編、京都大学学術出版会）、査読無、2013、37-57
④ 曽我亨, ‘Perceivable “Unity”: Between Visible “Group” and Invisible “Category”’, Kawai Kaori (ed.) *Groups*, Groups: Evolution of Human Sociality, Kyoto University Press/Trans Pacific Press, 査読有, 2013, 219-238
⑤ 内堀基光, ‘Assembly of Solitary Beings: Between Solitude and ‘Invisible’ Groups’, Kawai Kaori (ed.) *Groups*, Groups: Evolution of Human Sociality, Kyoto University Press/Trans Pacific Press, 査読有, 2013, 43-57
⑥ 高倉浩樹、アイスジャム洪水は災害なのか？レナ川中流域のサハ人社会における河川氷に関する在来知と適応の特質、東北アジア研究、査読有、17、2013、109-137
⑦ 内堀基光、心は身体的にしか語れない―心、命、魂は体のどこにあるか、身体化の人類学―認知・記憶・言語・他者（菅原和孝編、世界思想社）、査読無、2013、76-101
⑧ 大村敬一、感情のオントロギー：イヌイトの拡大家族集団にみる＜自然制度＞の進化史的基盤、制度：人類社会の進化（河合香吏編、京都大学学術出版会）、査読有、2012、329-348
⑨ 大村敬一, ‘The Ontology of Sociality:

‘Sharing’ and Subsistence Mechanisms’, Kawai Kaori (ed.) *Groups*, Groups: Evolution of Human Sociality, Kyoto University Press/Trans Pacific Press, 査読無, 2012,123-142

⑩ 大村敬一、交合する身体：心的表象なき記憶とことばのメカニズム、身体化の人類学(菅原和孝編、世界思想社)、査読無、2012、154-185

⑪ 大村敬一、未来の二つの顔に：モノの議会とイヌイトの先住民運動にみるグローバル・ネットワークの希望、グローバリゼーションズ：人類学、歴史学、地域研究の現場から(三尾裕子・床呂郁哉編、弘文堂)、査読無、2012、317-345

⑫ 高倉浩樹、(資料解説) 先住民の権利条約 (1989 年)、世界史史料 11 20 世紀の世界 II (歴史学研究会編、岩波書店)、査読無、2012、389-391

⑬ 窪田幸子、マイノリティの宗教―アボリジニ、宗教の事典 (山折哲雄監修、川村邦光ほか編)、査読無、2012、360-368

⑭ 丸山淳子、ケータイが切りひらく狩猟採集社会のあらたな展開―ボツワナにおける遠隔地へのケータイ普及がもたらしたもの、メディアのフィールドワーク：アフリカとケータイの未来 (羽渕一代・内藤直樹・岩佐光広編、北樹出版)、査読無、2012、174-189

⑮ 曽我亨、砂漠の民：過酷な環境を生き抜く工夫、ケニアを知るための 55 章 (松田素二・津田みわ編、明石書店)、査読無、2012、37-41

⑯ 大村敬一、マルチチュードの絶対的民主主義は可能か？：カナダ・イヌイトの生業からみる生政治的生産の可能性、生業と生産の社会的布置：＜いま、ここ＞のリアリティとグローバリゼーション (松井健・野林厚志・名和克郎編、岩田書店)、査読有、2012、343-364

⑰ 丸山淳子、エランドの肉も、ウシのミルクも：狩猟採集民サンの多様な生計維持活動、生業と生産の社会的布置―グローバリゼーションの民族誌のために (松井健・野林厚志・名和克郎編、岩田書院)、査読有、2012、57-88

⑱ 丸山淳子、「統治の場」から「生きる場」へ：ボツワナにおけるサンと「先住民」運動、文化人類学、査読有、77 (2)、2012、250-272

⑲ 高倉浩樹, ‘The Shift from Herding to Hunting among the Siberian Evenki: Indigenous Knowledge and Subsistence Change in Northwestern Yakutia’, *Asian Ethnology*, 査読有, 71(1), 2012, 31-47

⑳ 大村敬一、技術のオントロギー：イヌイトの技術複合システムを通してみる自然＝文化人類学の可能性、文化人類学、査読有、77 (1)、2012、105-127

〔学会発表〕(計 5 件)

① 曽我亨, ‘Pastoral Identities for Surviving Neoliberal Era’, International Symposium on "Indigenous Identity and the Discourse of Indigeneity in the Age of Neo-Liberalism", 2013.1.27, 東京大学東洋文化研究所

② 窪田幸子, ‘Difference of indigenous recognition in the age of Neo-liberalism’, International Symposium on "Indigenous Identity and the Discourse of Indigeneity in the Age of Neo-Liberalism", 2013.1.26-27, 東京大学東洋文化研究所

③ 窪田幸子、甘やかしと儀礼で育つアボリジニの子どもたち、『公開講座：人はどのように学んできたか？－狩猟採集民の子どもたちと人類の未来』、2012.12.22、キャンパスイノベーションセンター東京

④ 丸山淳子, ‘Land, livelihood, and the indigenous peoples movement: a comparison of two cases of the San of Botswana and South Africa’, Biennial conference of the African Studies Association in Germany, 2012.6.1, Cologne University, Germany

⑤ 曽我亨、難民の生存を可能にする新たな経済活動:南エチオピアにおける複数の民族が従事するラクダ交易、日本アフリカ学会、2012.5.26、国立民族学博物館

６．研究組織

(1)研究代表者

窪田　幸子 (KUBOTA SACHIKO)
神戸大学・国際文化学研究科・教授
研究者番号：８０２６８５０７

(2)研究分担者

曽我　亨 (SOGA TORU)
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：００２６３０６２

高倉　浩樹 (TAKAKURA HIROKI)
東北大学・東北アジア研究センター・准教授
研究者番号：００３０５４００

内堀　基光 (UCHIBORI MOTOMITSU)
放送大学・教養学部・教授
研究者番号：３０１２６７２６

大村　敬一 (OHMURA KEIICHI)
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：４０２６１２５０

杉藤　重信 (SUGITOH SHIGENOBU)
椙山女学園大学・人間関係学部・教授

研究者番号：７０２０６４１５

(3)連携研究者
丸山　淳子（MARUYAMA JUNKO）
津田塾大学・学芸学部・講師
研究者番号：００４４４４７２

(4)研究協力者
PETERSON NICOLAS
Australian National University・
College of Arts and Social Sciences・
Professor
JON ALTMAN
Australian National University・
The Centre for Aboriginal Economic
Policy Research・Professor